

## 談話室

46th Annual Meeting of the  
International Society of  
Electrochemistry に参加して

小野 幸子

早稲田大学理工学総合研究センター  
〒169 東京都新宿区大久保 3-4-1

(1995年11月13日受理)

The Report of 46th Annual Meeting of the  
International Society of  
Electrochemistry

Sachiko ONO

Advanced Research for Science Center and  
Engineering, Waseda University  
3-4-1 Ohkubo, Shinjuku-ku, Tokyo 169

(Received November 13, 1995)

1995年8月27日から一週間、中国のアモイ (Xiamen) で開催された第46回国際電気化学会 (ISE) 年会に参加した。この会は通常はヨーロッパ諸国で持ち回りで開催されているが、数年に一度ヨーロッパ以外で開かれ、国際的な研究者の交流に寄与している。発表件数は800件余、全参加者は500人以上の会で、特に国元である中国から大勢の参加が見られた。発表キャンセルも多かったが、経済事情を考えればいたし方ないと思う。筆者はこの会への参加は十数年前のブダペスト、ヴェネチアと昨年のリスボンに続いて4回目になるが、日本からの参加者は数人だった昔に比べると昨年今年も50人前後と大きく増加している。夫人同伴の方も増えてヨーロッパ並になりつつある。電気化学の分野ではアメリカの電気化学会 (ECS) とヨーロッパ系の ISE があり、共に国際的に科学者が集う会ではあるが、両者はその地域の気質を反映しているのか雰囲気異なる。ISE では一週間のうち半日を講演でなく Excursion にあてており、カジュアルな服装と雰囲気であらぶらと遠足にでかけその地域の名所を楽しむ、また夜には音楽会が用意されている。なかなか人間的で良いものである。もちろん同伴者用の Excursion がそのほかに毎日企画されている。

会議の Chairman は Xiamen 大学の Tian 教授で、Opening ceremony では市長の歓迎の辞があり、大勢の報道カメラマンが囲んだ。その後もテレビや新聞などの報道陣の多さに驚かされたが、実際毎晩テレビニュース

に流されていたという。最も驚いたのは、市長招待のウェルカムパーティーのホテルに向かうのに、パトカーと市長の車を先頭に、交通をストップさせて、会場から10台以上のバスを連ねてホテルまでノンストップで走ったことである。さすが共産圏と感心してしまった。しかし Xiamen の町そのものは経済特区であるため共産圏の面影は少なく、開発の遅れたヨーロッパの町の雰囲気である。確かにこの地域は昔はポルトガルの植民地で、オレンジ色の屋根など建物にまだにその名残が見える。女性達はおしゃれで物資は豊富に見えた。

本学会では8件のシンポジウムテーマが設定されていた。それを列記すると、1. Atomic and Molecular-perspectives in Interfacial Electrochemistry, 2. Physical Electrochemistry, 3. Sensors and Electroanalytical Chemistry, 4. Bioelectrochemistry and Organic Electrochemistry, 5. Electrochemical Energy Technology, 6. New Materials Related to Electrochemistry, 7. Corrosion and Surface Technology, 8. Industrial Electrochemistry and Electrochemical Engineering. である。発表は Plenary, Invited, Key note lectures 以外の約600件はすべてポスター形式である。筆者は7の Corrosion and Surface Technology の部門に参加した。ISE の現会長である Heinrich-Heine University の J. W. Schultze 教授の専門が Corrosion であるためか、今年は特に腐食関係の参加者が多かったと思われる。ちなみにもう一人の ISE 会長は横浜国立大学の仁木克己先生であり、京都大学の伊藤靖彦先生が National secretary をつとめておられる。公用語は英語のみであるが、Native はあまり多くなく、それぞれのお国訛りの英語でやり合っている。筆者の個人的立場からいうと不動態皮膜の成長の STM による解析を試みているフランスの Marcus の講演が意欲的で興味深かった。従来腐食研究の中心はインピーダンス法を代表とする電気化学測定に傾きがちであったから。シンポジウムディスカッションは Corrosion と Surface Technology に別れ、筆者のように Anodic Films の研究者としてはどちらに行くべきか迷った。結局 Corrosion のほうに出席したが、長老が中心で話題はややマンネリに感じられた。

ともあれ、この会議では世界中からの参加者の交流があるので、思わぬ出会いや再会がある。今回も以前の会議で知り合い、共同研究を行ったノルウェー工科大学の Nisancioglu 教授との再会や論文の打ち合わせのほかに、新たな共同研究の萌芽があり、論文投稿だけでは得られない有意義な一週間であった。